

ゴッド・オブ・ウォー

宮殿のテラス席で、軍備が整う様を眺めているファラオの前にスズメが舞い降り、
ラーが老人の姿を現した。

「ごきげんよう、ファラオ。」

「アメン・ラー様！祝福の儀は整えます故、今しばらく・・・」

「よいよい、状況は分かっておる。」

「ハッ！」

ファラオは^{ひざまず}跪こうと席を立つが、足がおぼつかずに、椅子に手を掛けその場に崩れ
落ちた。

「よい、そのまま聞け。お主を呪った魔女の場所が分かったぞ。」

「本当ですか？！」

「^{しゅったつ}出立はできるな？」

「^{もちろん}勿論です。どれほど、この一報を待ったことか・・・」

ラーは太陽を背に空を飛んだ。その下で、ファラオ率いる魔女の討伐隊が行軍し、
ロイは上り坂で馬が引く荷車を後ろから押して歩いていた。

討伐隊が切り立った^{きょうこく}峡谷を抜けると、砂漠の向こうに大きな岩の丘が現れた。彼らが

更に丘に近づくと、蛇が巻き付いた彫刻を^{ほどこ}施された柱が道を挟んで両側に^{そび}聳え、岩に掘られた神殿の入り口まで続いていた。

討伐隊の大將が手を挙げて、進軍を止めると、最後尾にいるファラオにアメンホテプが歩み寄った。

「如何なさいます？」

アメンホテプが前方の神殿の奥深くに続く真っ暗な穴を見て問うた。

「闇夜は不利だ。それに夜襲^{やしゅう}も考えられる。兵に休息をとらせたのち、直ぐに戦いの準備を。」

「御意。」^{ぎょい}

ロイは、水瓶から水分を補給し終わった兵士達に、自らが引いてきた荷車から武器と鎧を渡していった。

溪谷の外側に陣形を組むエジプト軍の後方から、ロイはイルヴァーナの神殿を覗き見た。

(アテナはもう来ているのだろうか・・・)

ロイが彼女に思いを馳せ、周囲を伺っていると、神殿の前から砂煙が上がり、地中からミイラ兵士が這い出てきた。千体近いミイラ兵は槍を手にして、立ち上がると、神殿の前に2列で並ぶ蛇の巨柱の間に整然と並び、奥から槍を背にしたゼム＝ゼムがゆっくりと姿を現した。

「ミ、ミイラだ・・・」

ロイは目を見開き、しばらくそのまま佇むと、後ずさりした。

ファラオの合図で太鼓が鳴り響くと、エジプト軍は進軍し、弓を引いた。弓矢は次々にミイラ兵を貫くが、彼らはものともせず駆け寄ってくる。

エジプト軍は、弓兵と入れ替わり、戦車を先頭に、槍と剣を持った歩兵がミイラ軍と激突した。

ロイの属する部隊の髭の隊長は剣を抜き、ミイラ兵の太刀を弾き返し、首を跳ねた。

ミイラ兵の首はクルクルとその場でまわり元の位置に戻ると、再び剣を振り上げ、隊長と鏑^{つば}迫^{ぜり}合^{あい}いとなった。

ミイラ兵は槍で貫かれても、その剣を振り下ろしてくると、恐れ慄いたエジプト兵は背を向けて敗走した。

ミイラの総大将ゼム＝ゼムは、地面に突き立てた剣に手を掛け、神殿の入り口で待ち構えて動かない。

エジプト軍の大將の戦車がミイラ兵を車軸に取り付けられた剣で蹴散らせながら、ゼム＝ゼムに向かって馬に鞭を入れた。

ゼム＝ゼムは、背負っていた鉄棒の槍を手にして駆けだすと、その槍を地面に突き立て、戦車の車輪の剣を受け止めた。ゼム＝ゼムは踏ん張りながら数メートル後退するも、鉄棒を押し上げながら戦車の攻撃をいなした。戦車がバランスを崩して、片輪で

傾き、スピードが落ちたところにゼム＝ゼムは槍を投げつけ、車上にいる將軍を背中から射止めた。

「なんという手練れ・・・」

エジプトの大將は、そう呟き、戦車から落ち絶命した。

その後も、エジプト兵は次々と倒れ、ミイラ達がファラオの乗る戦車まで迫ってきた。ファラオは馬に鞭^{むち}を打ち、戦車を走らせ、ミイラ兵達を蹴^け散^ちらすも、魔法のかかった包帯が彼らを繋ぎ留め、蘇らせた。蘇ったミイラ達は、両手を地面に突き、腰を浮かせると、水に飛び込むかのように平然とファラオの戦車の車輪に飛び込み、彼の車は横倒しになった。ミイラ達は、明後日の方向に向く手足をうごめく魔法の包帯によって元に戻すと、ハイタッチして称えあった。

「陛下！」

髭の隊長がファラオを案じ振り返ると、背中から冷たい刃が体内に入り込み、胸を貫いた。ファラオは、無数に集まるミイラ兵達に担ぎ上げられ、神殿へと運ばれて行った。

「大変！」

アテナは、ファラオが運び込まれていくのを見て、駆け出そうとするが、入り口にゼム＝ゼムがいるのを見て足を止めた。

ロイは、ファラオが運び込まれていくのをゼム＝ゼムの傍にある柱の陰から見送るアテナの姿を見つけた。

「アテナ！僕がやらなきゃ・・・」

ロイが振り返ると、敗走するアメンホテプを除き、エジプト軍は全滅していた。

ロイは、荷台の中から^{たいまつ}松明を取り出し、火打石で火を灯した。

「やるんだ！彼女のために！」

ロイは、手の震えで揺らぐ炎を見ながら唱えた。

「心のままに・・・」

アテナの姿を見ていると、炎の揺らぎは次第に収まり、ポポッと火の^{くすぶ}燦る音と共にロイの^{ひとみ}瞳に炎が写り込んだ。

「いくぞ、ミイラの大將！」

ロイは叫ぶと、松明でミイラ達を払いながら、ゼム＝ゼムに向かって駆け出した。ゼム＝ゼムがキンッとして地面から剣を抜き、身構えた。

ロイも剣を抜きゼム＝ゼムに切り掛かった。

「アテナ、走れ！」

だが、そのロイの言葉と同時に剣は叩き落され、^{みぞおち}鳩尾にゼム＝ゼムの蹴りが^{さくれつ}炸裂し、彼は地面に膝から崩れ落ちた。

「は、早く、行ってくれ！」

ロイは目を閉じ、死を覚悟した。だが、とどめを刺そうとするゼム＝ゼムの振り上げた剣はいくら待っても降りてこない。ロイが恐る恐る目を開けると、セトがゼム＝ゼムのマントに噛みついて引っ張っていた。

「今だ、やれ！小僧！」

セトの合図に、ロイは松明^{たいまつ}を拾い上げ、ゼム＝ゼムのローブに火をつけた。

「ウォォォ・・・」

ローブに灯った炎は、ゼムゼムの包帯へと燃え移り、彼はうめき声を上げた。

「いけ！アテナ！」

ロイとセトが同時に叫び、アテナは神殿の入り口に飛び込んだ。

ロイとセトの前に、黒焦げになったゼム＝ゼムが佇^{たたず}んでいる。二人が目を合わせ、ホッと一息ついた途端、ゼム＝ゼムの目が突如^{とつじょ}、見開いた。

ロイの剣は、ゼム＝ゼムに蹴り倒された際に床に落ちたままだ。

「女を生け捕りにしろ・・・」

ゼム＝ゼムの命令で、エジプト軍を全滅させたミイラ兵たちがぐるりと向きを変えた。

剣に伸ばしたロイの手を、ゼム＝ゼムの剣が遮^{さえぎ}った。ゼム＝ゼムが両手で剣を振り上げたその時、彼の足首にセトが噛みつき頭^{かぶり}を振った。

「アテナを追え！小僧！」

ロイが剣を拾い、立ち上がると、ワニの群れがミイラ兵の行軍を塞いでいた。

「イエー！ここはおいら達に任せて！」

ジョニーを先頭にワニ達が尾を振り、ミイラ兵をなぎ倒してゆく。だが、一人のミイラ兵が剣をワニに振り下ろそうとした時、真っ黒な大蛇がミイラ兵を締めあげて粉々に押しつぶした。ミイラ兵は砂となって土にかえった。

「同胞を連れてきた！遅れてすまん。息子達を、どうか頼む！」

蛇の王が『シューッ！』と唸ると、背後から大蛇が続けて何匹も現れた。ケセムはどんなもんだ、と尻尾で鼻の頭を擦り、ニッと笑って見せた。

ロイは、全力で神殿へと駆け出した。

セトは、身をかかわしてゼム＝ゼムの剣を避け続けていた。セトは、ゼム＝ゼムの突きをかかわした後、彼の剣を持つ手首に噛みついた。ギシギシと噛みつくセトの牙にうめき声をあげるも、ゼム＝ゼムは口元に笑みを浮かべている。ゼム＝ゼムは剣を手放すと、もう一方の手で剣を救い上げ、セトに向かって切り上げた。セトは身を捻って攻撃をかわすも、腹を引き裂かれ、地面に転がった。ゼム＝ゼムが踵を返し、ロイの背中を追いかけた。

「小僧！すまん！後ろだ！」

セトは腹を前足で押さえ、魔法で傷を癒している。その隙にゼム＝ゼムがロイの背後に迫っていた。ロイは振り返り、とっさに背中の中の盾を構えた。

ガァーン！

金属音が木霊し、ラーの盾が宙に舞った。ロイが剣を突き出すも、ゼム=ゼムの一刀で叩き落され、ズブッと腹から鋼の刃が体内に侵入してきた。

「小僧！」

セトが駆けるも間に合わず、ロイは^{ひざ}膝から崩れ落ちた。

アテナが薄暗い神殿の中で、ロイから貰ったビーズの腕輪の糸が切れ、地面に散乱した。アテナは、両手でビーズを掬い集めると、不安げに來た道を振り返った。

ロイは、ぶるぶると体を震わせながら腹の傷を押さえ、額を地面に付けて座り込んだ。彼の体からは急速に体温が奪われていく。

（ああ・・・、アテナはファラオに会えたらうか・・・）

ロイの視界が白け、意識が遠のいてゆく。

「ええい、肉体を置いてゆくしかない！ロイ、我が魂を受け入れるか？但し、我が役目を終えるか、お前が死ぬまで我と魂を引き離すことは叶わぬ！それでも共に戦うならば、その口で答えよ！」

「ああ・・・、アテナの為に戦えるなら・・・」

「ロイ！契約の言葉を！」

「セト・・・、貴方を受け入れる・・・」

「了解だ！」

セトの魂は、犬の体から光の球体となり抜け出し、ロイの胸の中に飛び込んだ。ロイが腹を押さえると、青い光が傷口を癒^{いや}していった。傷が癒^いえると、ロイの肩から黒い霧が立ち上がり、顔を覆^{おお}うと、ジャッカル^{ジャッカル}の面を形作^{かたち}った。

『素晴らしい！久々の人間の体だ！』

セトの声がロイの耳に木霊^{こだま}す。ロイの手が勝手に動き、両拳^{りょうけん}を握りしめた。

「これは？」

『俺がこの世で役目を果たすか、この命が尽きるまで、魂は己と共にある。』

「あの犬は・・・」

ロイは、黒い犬の亡骸^{なきがら}が地面に横たわっているのを見た。

『あれは転生して手に入れた我が器、魂は我そのもの。ただの抜け殻だ、気にするな。』

「でも・・・」

『神と生きている者の魂の共生は精神崩壊を招くため、普段は行わぬのだが・・・お前を守るには仕方なかった。』

「セト様・・・」

『セトでいい・・・。御託^{ごたぐ}はもういいだろう、暴れさせてもらうぞ！』

ジャッカルの面のロイが、剣と盾を拾い立ち上がり、ゼム=ゼムに切り掛かった。

セトとゼム=ゼムが交互に剣を交え、火花を散らせた。

『フハハハハ、^{ひさ}久しいなこの感覚！ロイ、お前の体は鍛えられて実に動きやすい！』

セトが足払いをするとゼム=ゼムは飛び上がってそれを交わし、宙で蹴りを繰り出し

た。セトはラーの盾で攻撃を受け止めると、後方に体を^{ひね}捻り、回し蹴りでゼム=ゼム

の^{あご}顎を跳ね上げた。

『全力で来いよ。』

セトは手のひらを返し、手招きをするとゼム=ゼムを挑発した。ゼム=ゼムはゆっくり

と視線をセトに向け、剣を両手で持つと頭上で構え、振り下ろした。だが、セトは、

ゼム=ゼムの剣が届く前に、彼の横をすり抜け、胴を切り裂きながら背後に回った。

ゼム=ゼムはぐらりと上半身を傾けるも、再びセトに向かって剣を構えた。

『不死身か・・・ならば！』

セトは、ゼム=ゼムの突きを避けながら飛び掛かると、息つく間もなく剣撃を打ち込

み、彼を石柱まで追い詰めた。

ドンッと背中を柱に付けたゼム=ゼムは、セトの攻撃が止んだのを見計らって、切り返

してきた。セトはその刃を、首を傾けて避けると、横一線、切り払った。ゼム=ゼム

の切られた黒く焼け焦げた腹は、再び魔法で傷が塞がっていく。彼が再び、剣を振り

上げると、セトは剣を鞘に戻し、背を向けた。

「切ったのはお前じゃないぞ・・・」

地鳴りと共に、背後の石柱がゼム＝ゼムに向かって倒れ込んできた。彼は振り返ると、
剣を捨て、両手で柱を受け止めるも砂煙と共に地面に押し潰された。

『当分、動けまい・・・』

「すごい・・・」

ロイが黒い霧の面の中で呟いた。

『さあて、待たせたな、ジョニー、蛇の王よ。後は俺に任せろ。』

セトは剣をぐるりと回すと、ミイラの軍勢の中に飛び込んでいった。